

## 平成9年度 公開講座概要

総合研究所が担当する平成9年度公開講座は、文化講座、社会学部公開講座、桜井市生涯学習シリーズ奈良大学教養講座、都祁村生涯学習シリーズ奈良大学教養講座の四講座を、前年に引き続き開催した。

近畿文化会と共催の文化講座は18年目を数え、「歴史的景観とは何か—大和、その過去・現在—」をテーマに開催、受講申し込み者は205名で、全5回の講座に、延べ761名の受講があった。桜井市、都祁村の教養講座は、それぞれの教育委員会との共催で実施し、地元の希望を尊重し、地域に密着したテーマを中心に開催した。桜井市教養講座では、196名の申し込みで、延べ655名が受講し、都祁村教養講座には65名の申し込みで、延べ205名の受講があった。

また、9回目の社会学部公開講座は、「これからの地域を考える！」をテーマに開催し、267名の聴講があった。

### 桜井市生涯学習シリーズ 奈良大学教養講座

私たちのまわりに目を向けよう  
— 郷土を学び新しい時代を知る —

5月11日 “そこから出て、そこに帰る”  
— 高齢化時代を生きる —

市川良哉

良寛詩集を開きますと、「頑愚（がんぐ）信（まこと）に比なし、草木（もつ）て隣となす」とか、「癡頑（ちがん）何れの日にか休（や）まん、孤貧（こへい）これ生涯」などという詩句に出会います。師匠の大忍国仙和尚は「良や 愚の如く 道転（うた）た寛（ひろ）し、騰々（とうとう）任運（にんぬん）誰か見るを得ん…」と讃えました。良寛はすることと言うこと、一見、愚な如くに見えるが、その仏道は高く広い世界に超え出ている。あくせくしないで天運に任せている心の世界を見抜く者があるだろうかということです。ここからも察せられるように、良寛の「愚」は生まれつきの単なる愚ではなくて、愚を根源的に生きて立つ「愚」です。“そこから出て、そこに帰る” そうした良寛は、自分にとって最も真実であるような生き方をしたのではないのでしょうか。高齢化時代を生きる私たちに何かを考えさせるところがあります。

6月8日

## 「年中行事」の世界

水野正好

日本の「年中行事」はいま壊滅しつつあるといっても過言ではない。年中行事の基幹であった農業生活、狩猟・漁猟生活も大きく変化、春夏秋冬の季節感も夏は冷房、冬は暖房と全く感覚できなくなりつつある。家族、親族、集落の構成も一変して、昔の父母兄弟姉妹の序列、村の講や祭の頭屋といった組織もいまは息絶えだえ。この講座ではこうした「年中行事」をとりあげて、ありし日の行事の面影を復原し、そのもつ意味を探った。正月は年中行事の始まりは鬼と深く係わる。鬼を射、鬼を祓い、鬼を追う、全てに鬼・鬼・鬼が横溢する。弓の神事・羽子つき・毬打・三義丁など、昔、親しまれた新年の鬼祓いのいくつかのあり方は仲々興味ぶかいものがある。田の初まりをめぐる田遊び、田舞は性と笑いが混然と融合する大切な春の神事、福を村へつれ帰る蘇民祭など村を活気づける神事がつづく。天帝は人間の身体に三尸九虫を配置、庚申の日の夜、その人の功過を天帝に報告させ、罪過大きければ三年、一月、三日と寿命を縮めると信じられた。人々はきそって徹夜し、庚申待ちと称して遊樂し三尸の昇天を遮げたという。この日、朝廷でも若者宿でも管弦遊樂、遊び乏しい村の日々に一つの変化を与える大切な行事となっていた。夏の早天、稲の枯死を恐れてのまじないもまた再三、大般若経を転読したり、雨乞いしたり、まことそれはそれは大変であった。年中行事は民衆の英知であり、支えられて村や人々はその生を全うしえたのである。そうした年中行事の世界を楽しい語り口で語る事ができた。

7月13日 「尊厳ある死」と家族のかかわり

大町 公

近年、われわれ日本人を取り巻く死の状況は大きく変化しました。その背景には、①平均寿命が著しく延びた。②ガンが日本人の死亡原因の一位になった。③死ぬ場所が家から病院に移った。それに、④近年の医療技術の著しい発達、を挙げることができます。また、家族の関わりを考えるにあたっては、⑤核家族の問題、⑥少子化の問題も考慮に入れなければなりません。

最も大きい問題は、医療技術の発達、特に延命医療のあり方が、技術優先になってしまって、〈生きることの質〉を求める人々の願いと必ずしも一致していないことです。患者本人も、家族も納得のいかない〈最期〉を迎えることになります。われわれはどういう死を望むのか、普段からよく考えておかなければなりません。

作家の柳田邦男さんは、現代を「尊厳ある死を自分で創らないと人生を完成することができない時代」、あるいは短く「自分の死を創る時代」と呼んでいます。この言葉の意味を、家族との関わりの中で考えた。

9月14日

## 古文書に見る近世の桜井

鎌田道隆

江戸時代の桜井市域には、初瀬街道（竹ノ内街道）や上街道という大和国内の幹線道路があり、またこれらの街道や村と村を結ぶ里道が発達して、地元の人々の交流はもとより、遠近の旅行者も行き交い、きわめて自然的・人間的空間と営みがあった。

街道沿いには宿場町や芝村藩・戒重藩などの極小藩の城下も形成され、また藤堂藩領なども混在しながら、おだやかな調和を保っていたと見ることができる。

宿場町や村々の平凡な日常的な生活の様様を古文書・記録から復元してみることで、また庶民的な信仰と参詣と街道沿いの人々の生活ぶりなどものぞいてみた。

10月19日

## 高齢社会をどう受けとめるか！

桂良太郎

地域で安心して老後を送るためには、「健康」「お金」そして「生きがい」が大切であると言われている。そして、なによりも家族関係をうまく維持していくことが重要である。いざというときに安心して頼れる医者や看護婦そしてホームヘルパーといった専門職（社会的資源）を地域のなかで常々もっていることが肝心である。

地域社会とは、「自転車で、自分の生活と関わる人々や施設やサービスが受けられ、あー今日も生きていて良かったと感じさせてくれる生活の場」である。

「腹八分目、くよくよせず、おしゃれ忘れず、毎日歩こう！」をモットーにしていきいきと老後を送ることが一つのヒントではないだろうか。

さらに人は、ただ人から援助を受けるだけでなく、一回しかない人生を有意義におくるためには、たとえ寝たきりになっても、家族や地域社会の人々から尊敬されることが大切である。特に「ボランティア活動」とは何かという事柄について考えることが今問われている。人との関わり（社会関係）をなくしたときにその人は「老いる」と言われている。自分らしく、自分のもっている「知恵」を地域で生かすこと（エンパワーメント）をこの講座を通じて考えてもらえたならば幸いである。

1月18日

## 万葉貴族・大伴氏と桜井

——生活・歴史・歌——

上野誠

万葉集は、言葉の文化財です。1300年もの昔の人の声を伝える万葉集。そんな万葉の世界に遊んでもらうのが、この講座の目的でした。

窓を開ければここは桜井…、すべてが教材といっても過言ではありません。今回は、万葉貴族・大伴氏について考えてみました。万葉貴族は、宮仕えをする官僚であると同時に、農繁期

には自らの故郷で農作業に従事する二重生活者でありました。つまり、万葉びとは二つの故郷を持つ人々なのです。その万葉貴族・大伴氏の根拠地の一つが、実は桜井と目されています。桜井市・外山には大伴氏の「庄」（たどころ）があったようです。この大伴氏の跡見の庄から、平城京の左保の宅に宛てた母と娘の情愛溢れる歌のやりとりを、万葉集は伝えています。なんと…万葉びとの手紙の一部を垣間見ることができるのです。

そんな、こんな、あれや、これやのお話をご当地・桜井の皆様にごさしていただきました。

2月15日

## ライフスタイルと健康

高橋光雄

健康とは、社会生活を営む上で身体的にも精神的にも異常のない状態で、一般的には食生活（栄養）・運動習慣（運動）・精神衛生（心）によって構成されると考えられる。

そして健康や体力づくりがやかましく言われるようになったのには、その社会的背景として、近代文明の発達があり、我々の生活様式や労働形態が変わってきたということである。労働時間の短縮や自由時間の増大などにより身体的活動（運動）不足の生活となって身体に悪影響を及ぼすようになった。この運動不足が、肥満・糖尿病・動脈硬化・虚血性心疾患・高コレステロール血症・筋・骨の脆弱化などをおこし、健康を阻害する生活習慣病（成人病）ともつながるものとして注目されるようになった。

そこで、我々は健康を考える上で絶対的な不可欠要素として栄養・運動・休養があげられるが、人生を豊かに生きるためには単なるHealthよりWellness「より良く生きる」という積極的な態度で、健康を総合的進歩的にとらえてゆく必要があるのではないか。それには個人のライフスタイルを見直し、精神的にも好結果をもたらすようなスポーツや運動（身体活動）を折り込む工夫がほしい。せめて普通の日常生活の中で「あるく」ということを意識するだけでも効果があると思われるので、それにもふれたい。

3月8日 「初瀬川の自然と多自然型川作り」

岩崎敬二

私たちの心をなごませ、子供達の魚釣りや虫取りへの欲望を駆り立てる美しい川辺の景観が、ここ数十年のあいだに次々と失われてきた。利水のためのダムや堰堤の建設によって、滔々とした流れははずたずたに引き裂かれ、治水のために川岸や川底はコンクリートで固められ、河原や中州は取り払われ、河川敷は芝で固められて、高くまっすぐな堤防が、無粋なまでに私達と水辺とを遠く隔てている。

しかし、この数年、これまでの人工的な川作りの反省と見直しが進んでいる。建設省や各地の自治体が、「自然にやさしい川作り」を合言葉にして、失われた自然の復元をめざし、「多自然型川作り」という新しいタイプの土木・造園工事を始めている。川辺に植物を植え、コンクリート製の護岸を石垣に変え、巨石を配して瀬や淵を作る、等々。さらに、多くの建設会社や造園会社

がそのノウハウを蓄積し始めており、その企業活動は「自然復元産業」という新しい産業分野に成長しつつある。但し、生物の生活への配慮を欠いて、人工的で箱庭的な水辺と化してしまったところも多く、自然が復元された河川を維持・管理する方法も未だに確立されてはいない。

この講演では、まず、「三尺流れて水清し」と昔から言い伝えられている、「河川の自浄作用」の解説を行った。多くの生物達の食う－食われる関係が、川の中の汚れを水中から除去しており、その作用は下水処理場のそれに匹敵するものであることを示し、生物の豊富さが、河川の浄化には不可欠であることを強調した。次に、全国の河川の現状をスライド写真によって紹介しながら、これまで行われてきた人工的な河川改修の問題点を指摘した。さらに、この数年全国で行われ始めている、川の自然の復元を目指した「多自然型川作り」の成功例を、横浜市の「いたち」川や梅田川を参考にして紹介した。最後に豊かな風土と歴史に恵まれた初瀬川の自然、特に生物相の様子と「多自然型川作り」が失敗に終わっていることを報告した。この失敗を教訓にして、奈良の風土と自然を活かした「多自然型川作り」の在り方を提示し、いかにして自然の多様性を復元し、家族で遊べる川を作り上げ、人間にとって好ましい水辺環境を管理していくかを解説した。

## 都祁村生涯学習シリーズ

# 奈良大学教養講座

## 生活文化を考える－ゆとりと豊かさを求めて－

### 5月25日 人間としての生き方と宗教心について

松井春満

日本人には宗教心が希薄だといわれるが、一見そのようになったのは明治維新以降である。幕末までの日本人はむしろ万事を宗教の頭（心）で考えていた。今日の地球上にはさまざまな宗教の争いが依然としてあることを、私たちはニュースとして知っている。では一体人間にとって宗教とは何であろうか。結論を先に言えば、宗教は人間による「ものの認識の仕方の一つ」であり、科学や芸術なども対等の位置を占める文化現象なのである。そのことをまず人間学的に明らかにした上で、宗教にもいろいろのレベルがあること（レベルといっても価値の上下を意味するものではない）、人が自己の信仰を持つということは、現代人にとっても生き方の確立の上で大きな意義をもつことを論じたい。と同時に宗教というもののもつ恐ろしさも。なぜなら人は信仰が強くなるほどその宗教の目でものごとを考えてしまうから。しかし同じことは科学などにも言えるのである。この私の議論は、シンボル理論という哲学的、心理学的学説に論拠を持っている。そういう立場から、今日の科学の傾向がもたらしかねない人類の危機と宗教的発想によるその危機の回避の問題などにも触れてみた。

7月20日

## 現代の死を考える

小西正三

ここ数年、マスコミにおいて、安楽死、尊厳死、脳死、臓器移植などが社会的な問題として大きく取り上げられてきています。このような問題は、高齢社会が進行し先端医療技術の発展とともにあって、延命、救命の医療が広く行われてきたためと考えられています。

しかし、わたし達がもっと考えなければならないのは、社会構造・生活様式などの変化が、わたし達の生きること、死ぬことについての考え方を変えてきたのだと思います。わが家で身内にあたたかく看取られて死んでいくこと、このようなおだやかな死は少なくなってしまうました。豊かな社会と考えられている今の社会が、山を荒廃させ、川を濁ったものにしていく、それと同じようにわたし達の死が、“モノとしての死”になっているのではないのでしょうか。

科学的といわれる現代医学では、“ひと”としての心の配慮はすくないようです。いってみれば、生物としての“ヒト”だけの医学といわれても仕方がないでしょう。

わたし達が死ぬということは、“あなた”と“わたし”との間で“わたし”の死を“あなた”が見送ってくれることではないのでしょうか。少なくともわたし自身の生きた証（アカシ）がわずかでもあなた達の心の底に残ってくれたら有難いと思うべきでしょう。

とにかく、“自分はこう生きるしかなかった” “こんなものだ” と納得して生き、死を迎えることが出来たらいいとわたしは願っています。

8月24日

## 家族の現在

光吉利之

近頃、日本でも「高齢化」「超低出生率」「晩婚化」「夫婦別性」「非婚」「DINKS」・・・といった言葉を頻繁に耳にするようになりました。このような言葉の背後には、日本の家族は今激しく変わろうとしているという実感や、これからの家族はどうなるのかという漠然とした危機感が流れているようにもみえます。

これまでの、わが国の家族の在り方と比べてみると、たしかに危機的状況にあるという見方も成り立ちます。しかし、観点を変えてみると、今までとは違った新しいタイプの家族を創造する過程にあるという考え方もありえます。

本講では、このように非常に見えにくくなった現在の家族に、いろいろの角度から光を当てることによって、その変化の様相と方向を探ってみました。

10月12日

## 国際交流を考える

—— 価値観の融合 ——

蘇 徳 昌

日中両国民は人間として共通の欲求・願望を持ち、千年以上に亘っての文化交流の歴史があり、20年この方の経済を中心とした大合作・大協力により、相互理解が深まり、価値観が急速に融合しつつある。

中国は世界の成長センターになりつつあり、21世紀は中国の世紀とも言われ、経済の成長・社会の発展は目覚ましいものである。

近代化の過程は工業化・都市化の過程であるが、中国にとっては計画経済から市場経済への移行・民営化の過程でもあり、社会体制の実質的な転換の始まりである。

下部構造の経済が変化するにつれ、上部構造も大きく変わって来ている。人間関係が階級的・政治的・精神的・イデオロギー的・村落的から人間的・経済的・物質的・脱イデオロギー的・グローバルになり、価値観も全体主義的から民主主義的、即ち普遍的な価値観になりつつある。

日中交流と価値観の融合の良性循環を促すのが両国民の責務であり、そのための対策・改革が必要である。

12月7日

## 日本の伝統的建築

水 野 正 好

日本列島で始めて家族を容れる「家」という建築が建つのは旧石器時代も末、1万3千年程前のこと。ナウマン象の骨や皮を使っての家であった。「家」が一斉に広まるのは1万2千年程前から。人々の定住が始まり「村」をつくるようになるのと規を一にする。やがて巨大なロングハウスが生まれ、高い掘立柱建築も誕生してくる。2千3百年前、中国から渡来した人々は彼の地の建物を日本に移植する。望楼、楼観という高層建築、稲米や船載品を納めた高床の倉、貴紳の居住する堂々たる規模の大殿や大室の建築が成立する。しかし、極めてその建築構造は単純、但し倭国女王卑弥呼や崇神天皇の宮室は中国明堂風の雄大な規模のものであった可能性が大である。建築の構造が複雑になり各技倆が粋を極めるようになるのは6世紀後半の飛鳥寺、法隆寺（若草伽藍）四天王寺などの仏教寺院がたち始めて以後のことである。礎石、基壇などを整えた寺院はやがて宮殿、皇居から地方の官衙にも影響を与え瓦葺建物も続々誕生してくる。寝殿造など優美、複雑な構造の建物の建築はこうした長い建築の歴史の中から生まれてくるのである。

2月22日

## 中世の弁慶伝承

小林美和

弁慶は今日のわたしたちにとっては、謎の多い人物である。その主人である源義経については、当時の公家の日記や、歴史記録の類によって、かなり詳細にその消息を知ることができる。その一方、義経と生死を共にした弁慶について、当時の記録はほとんど語ることがない。そのことは、中世から江戸時代にかけて広く流布した弁慶説話の数々の多くが、史実に基づくものではなく、次第に作り出されていったものであることを暗示している。

しかし、そのことは、今日に伝わる弁慶説話の価値をけっして貶めるものではないであろう。そこからは、今日の日本人が多く失ってしまったであろう中世人の文化や精神のあり方がくっきりとした痕跡として浮かびあがってくるからである。日本の近代化は伝統的過去を振り捨てることによって成立したが、それは果して正しかったのか。

ここで取り上げる『弁慶物語』は、中世後期から江戸初期にかけて流布した作品である。そこには、ほぼ成立の時代を同じくすると思われる『義経記』とは異なり、悪漢たちが繰り広げる無頼の世界がいきいきと描かれている。そこに登場する人物たちはいずれも、自らの欲望のおもむくままに振る舞い、いわば禁欲という語の対極にある。そうした世界を生み出したものは何であったのか？

## 奈良大学文化講座

「歴史的景観とは何か」  
— 大和、その過去・現在 —

9月20日

### 古代王都の景観をさぐる

水野正好

倭国女王卑弥呼の都はいまだに不明である。私は奈良県天理市大和神社附近と考えている。崇神天皇は三輪山西麓に「磯城瑞籬宮」を営む。つづく垂仁天皇は「纏向日代宮」、景行天皇は「纏向珠城宮」。ともに三輪山西北麓。こうした四世紀代の天皇の宮都の近くには「出雲」・「吉備」・「丹波」などの国名を付けた集落がいまも残る。『日本書紀』などを繙くところから地名が見え、古くからこうした国名集落の存在したことが認められる。恐らく、朝廷執政の官僚、官人としてこうした集落の「国人」が日々登庁し政務の一端を荷っていたものと想像されるのである。従って、当時の王都は執政の官衙一宮は存在するが、都、都人はなく、各集落と宮を往復する形であったと考えられる。従って多数の官人を一処に集住させるための方格地割で道路水路を整える都市機能はそこには見られなかったのではないかと思料する。

しかし、大化改新後の孝徳天皇の難波宮や天智天皇の天津宮、持統天皇の藤原宮、以降の平城京や平安京などは、官人に住地を班給した上番させるために「都」としての都市整備が果たされているのである。こうした都城・宮都は流行病の再々侵すところ、日々の暦・時を刻む漏刻、市と都市維持機構など独特の仕掛け、対処の手法が生まれている。

こうした古代の王都を対象に景観の復原、検証の成果を具体的にのべた。

9月27日

### 王朝文学と長谷寺参詣

山本利達

紀貫之は、長谷寺に参詣するごとに宿った家に長年たつて訪れた時、梅の花に添えて、百人一首の「人はいさ」の歌を詠んでいる。度々参詣していたようである。

蜻蛉日記の作者は願掛けに参籠し、帰途、貴公子の夫に宇治まで迎えてもらう幸せを得た。二度目には父と一緒に参詣している。

源氏物語の夕顔の娘玉鬘は、3歳の時母の死も知らずに乳母の夫の任地九州に渡り、18年後京に上ったが、内大臣の父には会う手だてもなく、助けを願って長谷寺に参詣し、母の侍女だった右近にめぐりあう。右近は源氏に仕えていたので、その導きで源氏の養女となり、父にも会え、物語の重要な人物となる。

源氏物語終末部の女主人公浮舟は、義父の任地常陸国から上京すると長谷寺に参詣し、帰途、亡父の宇治の旧邸に立寄り、貴公子薫に見そめられる。浮舟は勾宮の情熱にほだされ、薫と勾宮の愛に進退きわまり、入水を決意するが、物の怪にとらえられ、意識を失っていたところ、

長谷寺参詣の帰途の横川僧都の妹尼に救われ比叡の麓の小野で出家生活に入る。

夕顔や浮舟のようにと夢みて、観音のお告げに耳を傾けず源氏物語を読みふけた更級日記の作者は、晩年には長谷寺に参詣し、信仰を深めるようになる。

梁塵秘抄に「観音しよし験を見する寺、清水石山長谷の御山……」と歌われ、観音の御利益を願う参詣が、王朝文学の素材として、また作品の構想に重要な関わりをもっている。

10月11日

## ぶんか いさん つた 文化遺産を伝えるということ

西山要一

私達の祖先が日常生活や生産活動そして、信仰・芸術活動などで創り出した土製・木製の什器、仏像・神像彫刻、絵画、祭具、武器・武具から建築、遺跡にいたる大小・有形無形の文化遺産は、それらが創られた時代の人々の生きざまや技術・生活様式、政治や経済・文化を色濃く反映し、また、伝え来たった歴史をも物語ってくれます。文化遺産から私達は祖先達の今日までの歴史を知り学ぶことができるとともに、さらに、文化遺産は未来の社会を考え創るための手掛かりや指標をも与えてもくれます。

今日に伝えられている多くの文化遺産は、決して偶然に残されたのでは有りません。多くの先人達は優れた技術と良質の材料を用いて文化遺産を創り、卓越した保存施設と管理によって保存してきた、すなわち先人の創意・工夫と努力、大切に作る心が文化遺産をいまに伝えているのです。たびたびの地震や台風、戦争により消滅した文化遺産が多い一方で、そうした惨禍から免れ得たのも、先人の努力に負うところが大きいのです。

本講演では、正倉院に代表される校倉建物の機能と「曝涼」と呼ぶ維持管理方法、同様の機能を果たした土蔵、明治時代の国家による「宝物」の保存管理のはじまりと第二次世界大戦後の市民・自治体による文化遺産の保存と活用、博物館・美術館の完全空調による文化遺産の保存と自然環境を利用した文化遺産の保存など、文化遺産保存の方法と理念を通して、私達が次世代に文化遺産を伝えることの意義をのべた。

## 10月18日 地理情報システムジーアイエス(GIS)でみる大和の歴史的景観

碓井照子

21世紀は、マルチメディアの時代といわれる。歴史的な景観の復元や古地図と現在の地形図との重ねあわせなどコンピュータを利用したマルチメディア処理や解析が、最近、研究者間で流行している。これらの背景には、地図のデジタル化（電子地図の作成）があり、最近、奈良県の大縮尺電子地図（数値地図2500）が国土地理院から刊行された。

これらの電子地図をGIS（地理情報システム）を利用して処理し、大和の歴史的景観をコンピュータを通してみるとどのように見えるか。今回の講演では、GISにより見えてきた大和の歴史景観について説明し、一見、疎遠に見えるコンピュータと歴史学や考古学、コンピュータ

と大和の文学、コンピュータと大和の歴史地理学について、新しい視野にたって考えた。GISが一般家庭や町役場に普及すれば、古い絵図や地籍図などを家庭から見ることができ、現在の地形図と比較したり、空中写真を重ねたり、様々な面白い処理が可能になる。大和の歴史がより身近になるのではないだろうか。

10月25日

たもんやまじょう まつながひさひで  
多聞山城と松永久秀

藤井 学

戦国時代の末、畿内の実質的な覇者は三好長慶（1523-64）だった。長慶政権の拠点は主に河内の飯盛山城。その最盛期の勢力圏は山城・大和・摂津・河内・和泉・丹波・淡路・讃岐・阿波、それに播磨と伊予の一部に及んだ。信長が京都を制圧して畿内に戦国の終幕が引かれるのは、この長慶が飯盛山城で病没し、さらにその喪が3年間も秘され、永禄9年（1566）6月長慶の死が公表されたさらに3年後のことだった。

久秀が長慶政権の一翼を担って、国主として大和へ入部したのは永禄2年（1559）のこと。かれはこれ以後、奈良北郊の多聞山城と、西に信貴山城を築き、この二城を拠点に、古代寺院勢力や大和国人衆と壮烈な合戦をくりかえした。多聞山城は奈良と京都の、信貴山城は奈良と堺の咽喉部に当り、久秀は戦国畿内のこの三都市に勢力を扶植しながら、大和平定にのりだすのである。この二つの城には日本最初といわれる鉄放しに備えた多聞や、三層といわれた天守閣があった。

多聞山城には書院や茶座敷も設けられ、そこでは武将や三都の町衆がよく集まり、久秀のもと文芸や茶の湯の会が催され、戦乱の間に文化の灯をともしていた。

## 社会学部公開講座

### 『これからの地域を考える!』

**主 旨**：今改めて、「地域とは何か!」、「地球的規模での環境破壊とNGOのあり方」、「阪神大震災後のまちづくりとライフデザインの展開」「公的介護保険」や「市民活動推進法案」のあり方、そしてそれらを支える政治改革としての「地方分権」のゆくえ等、今まさに地域で安心して暮らすこととは何かを問い直す時代である。本講座は、さまざまな現代的課題にむけて取り組んでいる研究者や実践家と共に市民が一体となって考える総合講座である。

**場 所**：奈良県中小企業会館

**日 時**：1997年10月4日（土）13：30-16：00

**テーマ**：「地球と『環境』」

**講 師**：「環境市民」代表 浅岡美恵

奈良大学社会学部助教授 平岡義和

**概 要**：地球規模での環境破壊の中で、市民の立場からみた環境問題を、地域的視点との関わりから、その具体的事例のもとに考える講座

**参加者**：一般35名 学生45名

**日 時**：1997年10月18日（土）13：30-16：00

**テーマ**：「地域と『福祉』」

**講 師**：武庫川女子大学助教授 中田知恵海

奈良大学社会学部助教授 桂 良太郎

**概 要**：地域でその人らしく生きていくこととは何か、さまざまな社会福祉制度の改革の問題点を整理しながら、セルフヘルプグループ（自助グループ）のに代表される当事者の側からにたった福祉サービスのあり方について考える講座

**参加者**：一般55名 学生58名

**日 時**：1997年10月25日（土）13：30-16：00

**テーマ**：「地域と『政治』」

**講 師**：奈良女子大学教授 中道 實

神戸大学教授 依田 博

奈良大学社会学部教授 間場 寿一

**概 要**：「分権時代」に向かって政治的課題のなかで、政党、議員、有権者の行動を再検討しながら、国政と地方自治、さらに住民自治の現状を浮き彫りにして、そこにみられる問題点を未来に投影しながら、改革のゆくえを探る講座

**参加者**：一般31名 学生43名

## 総評

今回から社会学部公開講座は年3回の開催へと踏み切った。共通テーマとして「これからの地域を考える!」とし、それぞれ、地域と「環境」、地域と「福祉」、地域と「政治」というテーマで、内外のすぐれた研究者や実践者を招いての講座であった。

第1回目の地域と「環境」を考える講座では、当時京都で開催予定の国際環境会議と重なり、折しもその国際会議に向けて大きな役割をはたしていた市民活動グループ(NGO)の団体の代表者でもある浅岡美恵氏を招いての講演でもあり、白熱した質疑応答が行われた。

地球的規模での環境破壊としての二酸化炭素の排出問題はすべての国民が従来型の生活スタイルの見直しと、政府の政策に対する変更を要求していきましく人類すべての課題であることをこの講座から学び直すことができた。

第2回目の講座は、武庫川女子大学の中田知恵海氏を招いて、現在問題になっている「公的介護保険制度」や「市民活動グループの公的支援制度」などの諸問題について、いかに市民一人ひとりが地域で生きがいをもって活動していかなければならないかについての具体的な活動のあり方を学んだ講座であった。特に、セルフグループ(自助グループ)の活動が今後注目されることが提案され、新しいボランティア活動を模索する上での有益なアイデアが提示された。

第3回目の講座においては、内外の著名な政治社会学者二人(奈良女子大学教授中道實氏、神戸大学教授依田博氏)を招いて、「地方分権時代」のなかで、今後政治がどう動いていくかについてわかりやすい講演を聴くことができた。政治が環境政策はじめ、福祉政策の要であり、政治の安定如何によっては今後国民生活に大きな影響を与えることから、大勢の参加者を得ることができた。「住民自治」への取り組みが今後重要となり、一人ひとりが政治に関心を示さなければならないこと、そして特に若い世代が政治を自分の問題として考えなければならないなどの提案がなされた。

戦後の日本の経済成長が低成長時代をむかえ、今改めて「地域」とはなんであるかを真剣に考え、人々の暮らしや生きがいを自分自身の課題として考え直すいい機会をこの講座によって提供できたならば幸いである。

最後にこの公開講座は、奈良大学の学生たちの献身的なボランティアによって成功裏に終わったことを記したい。

(文責 桂)